

教育に明日は来るか

能力開発工学センター所長 矢口 新

第一部 教育は病んでいる

(一) 病状悪化の現象

教育は病んでいるといわれている。それはもう誰も反論し得ないほど明らかな事実のようである。

病状はさまざまな形であらわれている。受験戦争などという言葉にも、人々は不感症になってしまった。あきらめてしまったのかも知れない。教育課程の改訂に、ゆとりある学校などという言葉がとび出した。学校がゆとりがないということを白状したのである。

受験教育というものを意味のない教育だと思っている人は多いが、もうそんなことをいってみてもはじまらないようになってしまっている。誰もが受験列車に乗りこんでしまつて走り出しているのである。生徒たちが一生懸命努力していることは、そのことは悪くはないだろ

う。しかし全体的な人間の形成という点から考えると問題があるのである。ゆとりある学校という言葉がそれを物語っている。それも学校の側に問題があるという表現であろう。しかし、考えてみると、ゆとりある学校というのが何を意味するのかは、いっこうはつきりしない言葉だけが先ばしりしているのである。そこにまさに、現代学校のどうにもならないやり切れなさが表現されているのではないか。

乱塾時代という奇妙な言葉もすっかり定着してしまった。六〇万という塾の数はもう何をいってもはじまらないという感を抱かせる。学校の教師は塾で教えてはならないとされているから、六〇万の塾で教える人たちは、まったく新しい教師である。従来の教師群にかわって新たな教育者人口が生まれて来ているのである。彼らがどんな教育をしているのか、よくはわかっていないが、子どもたちの中には楽しんで行くものも多いという。学校の教師にとってはライバルがあらわれて来たことになるのかも知れない。

学校教育の側からの塾に対する反発もあつて、教育長たちが、塾の関係者をよんで何か要望をしたなどということも報道されているが、学校が塾を目的かたきにするのは当然なことではないだろうか。むしろ学校教育の側にいろいろ反省すべきことがあるのではないか。

国民の健康を守る大切な任務をもつ医者育てる学校が数千万円の寄付金で入学証を売っていると聞いては慄然とするものを感じるが、そういう例が相当に多いだろうということは国民がよく察しているのである。学校がそういうものになっているとすれば、それは一般国民が学校という名に期待しているそれとは似つかぬものになっているのであろう。

このように考えると学校は、必ずしも人々が考えているようなものではないのかもしれない。もう一度学校が何であるかを考え直してみる必要があるのかも知れない。

(二) 学校とは何か

学校の先生は学校が何であるかということをもっともよく反省し得る立場にあるのではないか。次のようなことを考えてみるとよい。小学校の先生の場合ほちよつとおいて、中学校、高等学校の先生の場合である。先生は教科担任だが、それぞれ自分の専門とする教科以外の教科について、生徒といっしよに試験を受けたらどれくらいの点にとれるだろうか。おそらく出来の悪い生徒より、もっと出来がわるいにちがいない。それはいっしよに試験を受けたらどれくらいの点が模範である立派な先生が、そうであるということを生徒に知らせてやったら生徒は安心するにちがいない。そんなにすべての教科について高い点数をとらなくてもよいのだ。何か一科目でできれば先生になれるのだと思うのではないか。

それはともかく先生だって生徒の時代にはいっしよけんめい勉強をしてどの教科についても落第点はとらなかつたにちがいない。それがいま試験を受ければ、ただ一教科を除いて多分すべて落第点どころでないことは間違いあるまい。もちろんこれは先生が頭が悪いなど

ということを言っているのではない。われわれ教師でないものは一教科といえども落第点以上に浮上することはできないのだから、その点では先生は一教科は少なくとも満点なのだから大したもののである。もっとも先生はもちろんわれわれだって特別に試験勉強をすれば、落第点を突破することができようとはいえる。しかしその受験勉強はちよつとやそつとの努力ではないかも知れない。かつて学校時代の受験勉強を思い出すとまったくぞつとする。今にして思えばあの馬鹿馬鹿しい勉強の間にもつとちがったことをやっておれば、もう少し仕事の出来る、世の中に役立つ人間になっていたらうにと、私などは思うのである。学校の先生方はその点についてはどう思っているのだろうか。

勉強をしたから、それだけのかいがあったと思っているのだろうか。もちろん試験勉強をし、大学への受験勉強をして大学を卒業していま教師という職業についているのだから、そういう意味のかいはあつたにちがいないのである。しかしその勉強の興味のかいはあつたと思う人は少ないのではないか。先日ある会合で「こういう問題について、もっと関数的な考え方をすべきではないか」という言葉を使つたら関数というのは勉強した覚えはあるが、どういう考え方をすることなのかはいまだによくわからないという人々がほとんどであつた。もちろん数学の専門家でないいわゆる文科系統の大学を出た人々の集りであつたが。

このように考えて来ると、学校の教育が何であるのかということについては改めて考え直してみたくはないか。もちろん学校で試験勉強をしたことは、しばらくの間にすぐ忘れるものであることは誰も知っている。

(三) 長いトンネル

学校の教育があまり役に立たないということとはよく人々の口の端にのぼる。それはどういうことなのだろうか。それは学校で教えられたことを忘れるからであろうか。忘れないように学校が教えてくれないからであろうか。そんなことは出来もしないしまたそういう考え方もそのものがおかしいということは、何よりも先生方が体験的に知っているのである。多くの先生が言うことはまさにその通りである。受験突破の教育は何もかも暗記するということである。数学さえもがすっかり暗記物になっていることは、教科書を見ればよくわかる。そういうものは忘れるようになっていくのである。試験の時だけの役にしか立たないものなのである。

われわれは覚えたことを一生忘れないでいるという例もよく知っている。例えば自転車に乗るなどということである。それは頭だけで、言葉だけで覚えられることではない。頭と身体と全体の神経を使って覚えたことだから忘れないのであろう。昔から身体を使って覚えたものは忘れないという通りである。有名なエビングハウスの記憶の実験によると、乱数表のようなものを記憶させれば、半日たたないうちに七〇%を忘れてしまうというのがあるが、それほど極端ではなくとも、今の学校の教育がそれに類似している所がなくもない。つまり勉強する人間にとって、意味のあることとして頭と身体を使って受けとるものに、学校の勉強がなっていないのではないか。つまりそれによって自分の行動をつくって行くというようになっていないのではないか。意味のないことを記憶させられる結果になっているのではないか。記憶する事柄そのものに意味がないのではないが、猫に小判のたとえもあるのではないか。まったくそれと同じだということではないが、それに近いのではないか。猫とはちがうから、受験突破のためということ

になれば、ともかく暗記をすることになるのである。自分にとってなんであるかは問題にならない。自然のことであろうが、社会のことであろうが、そういうものが自分の人生にどういう意味のものかを考えたり感じたりする前に、自分はまず記憶の容器であることに徹するのである。余計なことは考えるな、である。

それでよいのだという考え方が実は意外に根強いのではないか。少なくとも今の社会においてはそれ以外には手がないというのである。それは教育を受けるということ、教育するということが、人間の成長とは関係なくなっているということであろう。学校に入って卒業して最終には大学を卒業すればよいのであって、そこは人間を育てる場所ではないのだ。現代の学校は、そういうものになっているが、昔からの学校の役割がそれにかぶさっているから、学校に人間の教育を期待する人もいるけれども、それは実は過去の学校の残像に対して抱いている錯覚なのではないか。

(四) 学校の機能喪失

昔は人間が一人前になるためには、職場に入って徒弟となって修業をした。その奉公の間は無給同然で働いて、一人前になると、のれんわけをもらうというしきたりであった。現代は徒弟奉公のかわりに学校で苦勞をするのである。しかしその苦勞が一二年間、あわよくばその中で選ばれて三〇%に入れば、さらに四年の学校通いをすれば人より多いサラリーの支給をうける身になるというわけである。現代社会は労働を売って賃金をとるという考え方がはつきりしていて、労働の苦痛に対して雇用する側はその代償を支払うことになっているが、その原則が学校に対しても適用されているのかもしれない。学校というあまり意味のない生活の場所で余計苦痛をしのんで来たもの

には、有利な地位を与えるということになっていくらしい。

しかし最近の就職情報によると、大学卒業者の就職戦線もまた非常にきびしいと言われる。大卒者の大手市場は大企業と公務員だということだそうだが、そういう所へ就職できるのはごく僅かで大卒者総数の二五%以上にはなりそうもないと言われている。もつとも大企業と公務員が長期間学校で苦痛を忍んできたものに対する有利な代償なのかどうかについては異論のある人もあるが、一般にはそういう常識になっているのである。こうなると学校に在学する期間が長いということだけでは有利な地位を得られるということにはならなくなっている。一流大学から一流企業へなどという言葉も出てくるように、大学の格差も公然と言われるようになって来ている。子どもをもつ親たちの四割から五割が大学へやりたいと願っているが、それがもし就職のためだとすると、一流大学へということを目指すのでなければ期待はずれになるといふものである。

このように見て来ると、中学、高校がもつばら上級学校への受験競争のための場となり、大学がその目標であったが、その大学が一流大学を除いては就職競争にはじき出されていることになると、何のため学校へ通ったのか、就職の保証書が与えられないというのでは、この面でも学校は機能を喪失しつつあると言わざるを得まい。

学校がなりふりかまわず受験のために教育の機能をはらい捨てたあげく、そのしがみついていた就職への機能も失ったということになれば一体学校とは何であろうか。かつて中世の末期にローマ教会が天国への入門証として免罪符を売り出して世のひんしゆくをかつたが、現代の学校もそれに近いことをする大学がふえて来た。医科大学がそういうことをする地盤もわかるような気がする。一流企業とか官庁とかへ行こうとすれば一流大学へ行かなくてはならないが、医者になれば個人営業で、うまくやれば長者番付にもものだから、それがわ

か数千万円の入学金でよいのなら、その天国への入門証を手に入れようとする人々が出て来るのも当然(?)だろうし、学校企業がそこをねらうのもまた必然というべきであろう。投資である。

(五) 出なおしが必要

学校をこのように検討してみると、われわれが素朴にそこでは人間の教育をしてくれる場所だと思っていたのは、考え直さなくてはならぬのではないかと感ぜられて来る。人間の教育というのも生ぐさいのが本当なのであって、それはやはり富を得、権力を握る手段の中の一つにすぎないのか。人間を育てるなどというのはしよせん夢にしかすぎないのか。

若い頃から四〇年以上も教育の世界を見つづけて来た私の感想をいうなら、いついかなる時代にも純粹そのものという教育は存在しないようだが、しかし現在ほど、理想を追求して行こうとすることが出来にくくなってしまったという時期はなかったように思う。学校を人間の生ぐさい利益追求の手段として位置づける社会的な動向が、すっかり根を張ってしまつて、その中で教育はもう動けなくなつていくという感がする。病気でいえば、がんがそこらに転移してしまつて、教師も、親も子どもも、教育行政者も、皆それにおかされてしまつて、それぞれ呆然自失しているという状態になつていく。何をやるうにも手が出ないのではないか。せいぜい、ゆとりある学校にしようではないか、というような気やすめをいつている段階ではないのか。何よりも安息が必要だという危篤な段階なのかも知れない。教育に明日という日はもう来ないのではないか。多くの教育者は、ただ惰性にしたがつて、やっているだけしか手が無いのではないか。人がやるから自分もやっているが、自信をもつて生きていけると言えるのかどうか。これ

はあまりに悲観的なのか。

学校がこのような状態なら、昔のような徒弟教育の方がむしろよいのではないか。出来るだけ早く学校をやめて、仕事の場で苦勞しながら、ものを覚えるような仕組みにした方が、まだ人間が出来るような気がする。普通りの徒弟でなく、それをもっとより合理的にした方が、徒弟時代が終れば仕事もできるし、人間としての生き方も身につくのではないだろうか。学校で、仕事の世界のことは何一つ身につかず、人間として生きてゆくための基本のものも何一つ身につかずというのなら、学校くたばれとも言いたくなるではないか。

現代は職業集団がそれぞれよい研修の機関をもっていて、学校ではできないことを教えてくれる。それは生活や仕事に結びついているから、身につく知識となるのである。学校のように試験があるから暗記した知識ではない。生活の中に位置づいたものなのである。学校はどうしても出直すべきなのだ。

第二部 転換期からの要請

(一) 学校はよみがえるか

病気を直すには病状をはっきりとらえなくてはならない。現代の医者には人間を見ないで身体を部分としてしか見ないから、部分は直ったが生命は失われたなどということが多くという。教育の病も、部分と

してとらえていてはどうてい直らない所に来ているのではないか。そういう意味で、第一部で病んでいる状態を述べて見た。まだまだ多くのことが見られなくてはならないのだが、それは皆さんにまかせたい。一八九九年というから随分昔の話だが、ジョン・デューイが講演して現代の学校は考え方を根本的に改めなければならぬというようなことを主張したのが、後にまとめられて『学校と社会』という本になっている。彼がその中でいわんとしたことは、学校が出来てそれ自身で成長発達すると、いつの間にかやら社会からはなれて、社会が必要とする人間を育てることを忘れてしまつて妙なことをするようになる。それ故に学校の中に人間社会が基本的に何が必要かを考えて、いつも生きた社会の必要とするものをいれておかなくてはならぬということであつた。デューイはその中で例えば現代の学校では(一九世紀の後半のことであろう)テストをすることが支配的であると述べて、それを打破することを主張して次のように述べている。

「単なる知識の習得には、なんら明白な社会的動機もないし、それが成功したところで、なんら明瞭な社会的利得もない。実のところ、成功のためのほとんど唯一の手段は競争的なものであり、しかもこの言葉の最も悪い意味におけるもの―すなわち、どの子どもが最も多量の知識を貯え、集積することにおいて他の子どもたちも先にけるのに成功したかを見るために復讐ないし試験を課して、その結果を比較することである。じつにこれが支配的な空気であるから、学校では一人の子どもが他の子どもにも課業のうえで助力することは一つの罪になっているのである。」

デューイはこのように言つて、学校に作業をいれることを主張する。一人一人が知識を貯えるには一人一人の努力によつてなされなくてはならない。そういう場では他人に協力することは努力をさせないことになるから、つまり罪を犯すことになるというのである。ところが

作業をする場では他人への援助が他人を害するのではなく、相手の能力をのばすような役割を果すというのである。ここでも競争が行なわれるが、知識の量でなく、なされた作業の質、つまり社会的な規準から見られることになる。こういうことは本当の意味で社会生活の基盤の上に子どもの生活が成り立つことなのだという。彼は作業を中心として学校を組織し直すと、どうなるかということについて、

「作業が学校生活の各部分を結合する中心とされるばあいにはあらわれてくる差異を、言葉のうえで述べることは容易ではない。それは動機における差異であり、精神と雰囲気の違いである。」

と言つて後で、子どもが台所で働いている所を見るとよい。そこには子どもの精力がみなぎっていると云っている。

これを見るとデュイイは現代の学校が陥る弊害を既に八〇年前に予言しているのである。そういう予言があるのに、どうして改めることが出来ないで、ますますその禍を大きくしているのだろうか。知識の量を競争するという学校教育のあり方はますます高度成長をとげている。業（ごう）というべきであろうか。デュイイの思想はわが国にも紹介されたが結局実を結ばなかったといわなくてはならないのである。

『学校と社会』（岩波文庫版参照）

（二）教えない学校

それから八〇年近くたった現在、社会の変化の事情に合わせて、まったく同じ思想でもっとラジカルな未来への展望が、転換の思想として生まれた。次にその主張を紹介しよう。その主張者は教育機会の均等の問題に関するコールマン・リポートで有名なジョンズ・ホプキンス大学のコールマンである。

彼は現代社会のコミュニケーションの発達に教育に対していかな

る影響を与えているかという所から出発するが、これについては二つの方向から検討する。第一に「学校における新しい通信技術の応用によるもの、たとえば教室における閉回路テレビ、ミニコンピュータ、視聴覚機器、その他広範囲の新技术などの応用」であるが、これに関しては彼は否定的である。「将来に対する期待が何年も現実に先行しており、いざそれが現実となった時には、まったく期待外れになるというのが、これらの技術の特徴である」と言う。

これに対してもう一つの側面は、「学校教育に対して計画外の予想もしないような影を与えるのは、教育機関の外部におけるコミュニケーション構造の変化、それも強い浸透力をもった変化によるものである」と彼はいう。デュイイの時代と異っているのはまさにこの点であろう。つまり学校の外側における社会の変化が大きい。それに対して学校は何を考えるのかということが彼の問題である。

彼は学校が生まれたのは情報不足の社会に生まれた。ところがそれがまったたく変ってしまったのだから、学校の役目はかわるべきだという。学校の教育は本や先生との接触を通じて間接体験を提供するという伝統をもっているが、現在は子どもたちの学校外での間接体験は急激に増大した。子どもたちが変ってしまったのだ。だから依然として間接体験を与えようなどという考え方で子どもに対するのはナンセンスというものである。学校はよけいなことをするなである。

こういうコールマンの考え方はやはりデュイイ的な主張となる。間接体験の場合はその媒体が何であろうが、人はその行為の外側にいる傍観者でしかない。コミュニケーションが発達すればする程子どもは幼い時期から傍観者としての性格が強くなる。このことがこれまで以上に性格を受身にし、あるいは欲求不満や無力感を感じさせる。また道徳的ではあるが戦闘的ではなくなるといった性格に育って行くのだという。これからは昔からの学校の機能が必要なくなつたというこ

とを意味するし、もう一つは新しい学校の機能が生まれたのだということになる。彼は言う。

「われわれの社会が情報豊かになってくるにつれて、行動の乏しい社会になってきている。」

「現在の豊かな社会では、一二才どころか二〇歳の人間もまだ子どもである。」

「社会が豊かになるにつれて、子どもの環境は自分の責任で生産的な活動をする機会、いいかえれば子どもの力をためし子どもの向上に役立つような活動をする機会が乏しくなってきた。」

このような学校外社会の変化によって心配なことがある。学校が情報を与える必要のあった社会では、子どもは学校の外で他人の幸福に貢献しようという責任感のある若者としての役割を果すべく置かれていた。子守りの手伝い、家事、商売、農業など、厳しい環境に生き残るものであった。それがなくなつた現在、

「これからの学校は過去において大部分学校の外でなされていた活動に焦点を置いて運営されなければならないということである。その第一は、他人の幸福に通じるような責任感のある、生産的な人間として子どもの能力を育成できること。その第二は環境のもつ豊かな情報と情報処理能力とを利用する戦略を開発することである。」

「将来の教育機関がこのような流動的な状況の中でどのような姿をとるかは明確ではないが、その重要な目標が子どもを教えることであつてはならない。この考え方は、おかしように思われるかもしれないが、これは将来の教育制度を成功させるための鍵となるものである。この原則を認識しなかつたことが、現在の学校に弊害をもたらした主な原因である。」

「新しい教育機関は主として、子どもを教えるという誘惑に抵抗できれば、その目標を達成することができる。」

この考え方はデュイイが現在生きておれば当然そう考えたであろうと思われる考え方である。デュイイは学校を抽象的な知識を与えることに反対であつた。今から八〇年も前にそうであつた。それは、人間を育てることにならない、知識の容れものとしての人間は人間でないと考えたからである。現在は学校外で人間を情報の容れものにするコミュニケーションが発達して、人間は人間として行動する主体でなくなりつつあるとコールマンは見ている。だから学校は生徒を行動させる場所として転換しろというのである。

グリンバーガー編・「コンピュータ・通信―その未来と課題」

(電気通信総合研究所訳) 近代社会における教育の頁参照

(三) 転換期の自覚こそ

デュイイとコールマンの思想を紹介したのは、彼らが近代教育を最も鋭くえぐつているからである。二人のいう所はまったく根本的である。今の日本の教育は彼らのいうことに耳をかすべきだと思つたからである。

日本は百年來の近代教育の採用によって現在、経済大国を誇示する状態に達している。その人間的エネルギーをつくつたのは日本の近代教育だというのはあながち誇張ではない。その近代教育をつくりあげる原動力となつた思想は、あの有名な太政官布告「身を立て、産をおこし」であり、また福沢の「学問のすすめ」にある。学問をするかしないかで富貴となるか貧賤となるかがきまるといふ思想であつた。現代的にいえば教育投資の思想であつた。

そして、知識の吸収がはじまつたが、その教育のモデルとなつたのは、あのデュイイが批判した時代のアメリカの教育であつた。学制が發布されたのは一八七二年である。それから二七年後にデュイイは

「学校と社会」の思想を主張したのである。日本の年号でいえば明治三二年である。だからデュイの言に耳をかす時代ではなかったのである。わが国の義務教育がほぼ完成したのは明治四〇年、一九〇七年である。それからさらに七〇年わが国はまっしぐらに教育の近代化の道を歩きつづけてきた。その七〇年間の後半の三〇年間は義務教育が九年、いな高校もほとんどが入学するようになったことを思えば一二年となったとも考えられる。敗戦後の三〇年間に義務教育が倍増したともいえよう。それがまた経済の高度成長と相応していたのである。どこから見ても量の目ざましい拡大を日本はなしとげたのである。そこには近代教育を反省し改編する何の理由もなかったといえるかもしれない。教育が病んでいと強く言われるようになったのは、ちょうど経済の高度成長が低成長へ転換を強いられるようになった時期である。経済が夢からさめる時がきたと同じように、教育も夢からさめる時が来たのではないか。

近代教育がデュイやコールマンの言うように転換をしなければならぬとすればそれは近代教育の教科、教科書、教師という形式そのものが反省されなければならぬということであろう。デュイはそれを作業を中心とした組み立て方の学校にせよという言い方で表現し、コールマンはそれをもっと端的に教えよとするのをやめろというのである。どちらにしても教科によって与えられる知識は人間を育ててなくなっている。それは無責任な傍観者をつくるにすぎないという人間としての行動する力をもたせることはできない。

教師は教科書にあることを教えればよいということになっている。その教科書は人のつくったものである。教師は教科書の解説者にすぎない。学校に来る若者たちが、いかなる人生を送るのか、そのためにいかなる行動力をつけなければならぬのかを見なくなってしまうている。いな見えなくなっているのかもしれない。ただひたすら受験戦

争に向ってひた走らなければならぬ運命はそこに生じているのである。試験というのは、人間の力をためしているのではない。それが人間の力を見ている錯覚にとらわれてしまつて、そこから逃れられなくなっている。

教師がこのままの状態であると、最後にはポロ雑巾のようにすり切れてしまうのではないか。いかに努力しようとそれは人間を教育することにほならないということに気付くことなのだが、それはコールマン流にいえば学校が教えることをやめろということであろう。そんなコールマンの言うようなことが果して実際に成り立つのであろうか。コールマンに対して、例のC A Iで有名なスタンフォードのスピーズが、意見には賛成だが時の尺度がちがっているのではないか。そういうことが今世紀に成り立つだろうかという批判をしているのはある意味で深刻な反省である。

(四) 転換は可能か

現代の日本の社会がさまざまな転換の問題に直面していることは多くの人が言う通りである。しかし転換というのはある意味では新しい建設よりもむづかしいことであろう。そこには絶大な人間的エネルギーが必要である。それは傍観者の知識の所有者ではとうていなし得ないことであろう。それは百年來みんなが歩きなれた道と異なった道を歩くことである。ということは教育もまた大転換をとげなければならぬということである。それは制度の改革というような表面的なことではない。教師や生徒の行動の仕方がかわることである。コールマン流に言えば、いままで学校の外でやったことを学校の中でやることなのである。教えることをやめて、教えなくなることなのである。情報と情報処理技術を含めて、その利用の道を開発することが、教師と生徒

の仕事になるという。そういうことが一挙に成しとげられるだろうか。教育者たちはこの困難な仕事に向って何を今なすべきであろうか。その道をさがすが明日の教育をさぐることであろう。

第三部 教育の転換をめざして

(一) 行動による学習とは何か

現代教育の病根は一朝一夕で除きうるようなものでない。また制度をいじくり廻しても、それで改まるようなものでない。それはもっと根本的な教育の質の転換の問題である。それは人生観、世界観ともかわりのある問題であって、実際に教育の具体的な姿勢がかわるには数十年を要することではないだろうか。といってそれを座して待っているというのでは、永遠に転機は来るまい。

一人でもよい、教育にたずさわるものが教育の質の転換に向って努力をすることである。その第一に着手すべきことは、教育の場、より具体的にいえば、学習の場を行動の場としてつくり直すことである。

学習とは何かということもすでにデューイが有名な言葉、なすことによつて学ぶという言葉をはいている。しかしこのことがわが国では極めて倭少化されて、本来の意味にとられていない。デューイはむしろどれだけのドゥーイングをしたかによつて、それだけ学習しているということに気付くべきだということを行っているのである。このこ

と関連してもう一つ注意すべきことは、教師が学習させようと思つて教師が説明すれば、そのことについて理解はするかもしれないが、同時に人の話によつて理解しようという姿勢も学んでいるから、自ら行動して自分の課題を解こうとしないという姿勢は出来て行かない。むしろますます受動的な傍観者のな姿勢をつくるのである。デューイはこういうことを並行学習というようにいつているが、このように考えると、現代の知識注入型の学習が何を生徒の中につくりあげて行っているかは深く反省してみる必要がある。

未来社会への展望からみても現在の教育の場に最も欠けているものは行動的姿勢であつて、自主的とか創造的とか要望されることもすべて行動することの上になり立つものと考えらるべきであろう。また現代の学校に欠けている社会的行動、協同的姿勢の形成の場面は、まさにデューイの思想の所でも紹介したが、まさに行動の場で育つものである。現代の学校が教科別の教育で、教師の間において協同が成立しないのであるから、生徒の間に協同する場が成立しないのは当然であつて、そこから学ぶのはデューイのいうように利己的な態度のみである。

(二) 新たな教材の開発こそ

教育改善の方策として現在さまざまながいわれているが、どれも知識注入の教育を生み出した思想の上に立っている所に問題がある。たとえば教材の精選などという問題が出ているが、教材の側からのみ教育を考える所は、過去の伝統的な思想から脱出できない考えである。現在教科の内容となつている教材、その配列は結局、見られた結果としての知識を語るという立場に立って編集されているのであつて、自ら探究して物をさぐるという姿勢で行動するものにとつて

必要な教材ではない。自然の対象にしても、社会的対象にしても、自ら探究して行こうとするものを援助する教材という観点に立つたなら、意味のない教材である。もし、自主的な探究者への援助ということになったら、その行動によって生ずる疑問を自ら解くに必要な現実のシミュレーション、実験の材料等準備されるべきであろう。そういう点から考えると、教材の精選というのが、教科書にもりこむ知識ということを前提として考えられている限り現代教育の病弊を生み出した思想そのものの上に立っているのであって、そこからはほとんど何も生み出す力にもなるまい。現代の教材は異った立場で検討されるべき運命にあるのである。知識教育にかわって行動形成の立場でいかなる教材が必要かの検討を必要とするのである。

同様に視聴覚的方法についてもそれが教科書教材が唯一の教材であった時代に生み出された教材としての性格を、新たな行動の形成の場を使用される教材として見直しをする必要に迫られていて、その見地からまったく新たな態度で教具教材が構成し直される必要があるであろう。

(三) 当面の課題は何か

デューイは学校の教育を作業を中心として組織し直すことを提案したが、現在までの一般的な雰囲気では、そういうことは全然実現しそうにもない。そこには、現代社会の人間にとって何が必要かという認識についてデューイとは異った思想があるのである。それは誤っていることもたしかであるが、しかも誤った思想が圧倒的に強い力をもって現代教育を支配しているのである。国語、数学、社会、理科が主要四教科などという俗論が支配し、その何れもが暗記物的性格の教科となってしまうていることを改める努力がなんとかしてなされない

ものか。少なくとも体育や芸術や、技術的学科が、今後の学校の中心に位置づくように努力することである。それには教師のすべてが、それらの教科で人間としての教育がいかになされるかを実証的に研究してみることであろう。教科外活動でもよい。それらの分野に関する活動が活発に行なわれるように配慮し、教師みずからも、そういう活動を生徒と共に実践的に追究することである。

特に高等学校の普通課程においては、せめて課外の時間には技術の活動を行なって生徒が協同して物をつくり出す世界に入りうるような努力をしてみることが他の知識注入教科の中で無責任に受動的な姿勢をし示さない生徒たちに、積極的能動的な姿勢をとらしむる転機をもたらすかもしれない。

各教科を行動の場としてつくり直すことは大変な仕事であらう。現在の教科書は知識注入的ムードでつくられているから、本来の意味で考える教材となっていない。また自ら対象にぶつかって問題をとき、解決の道を見出すという行動の場における教材ではない。たとえば数学の関数に関する中学校の教科書にしても、関数の考え方が生活のいかなる場所でも使われる必然性のある考え方なのかとらえられる教材ではない。計算の仕方が説明されているという教科書が多い。いわば計算の手順だけが練習されるような内容であって、数学的思考を訓練する教材が乏しいのである。デューイのいう生活の動機づけというのはこういうことであって、そういうものがない所には主体的な行動は起らない。問題を出してそれを解いても、それは模倣した計算をやっているにすぎない。そういう点は教師が自ら学習の場を設計しなければ、現在の教科書制度のもとでは、改善は望めそうにもないのである。

これは数学に限らず、理科、社会すべてに共通することであって、自ら探究して結論を導き出すという歩みをさせるようになってい

いのである。理科、社会については、探究の場としての教材群を設計することに教師は多大の努力をしなければならない。それは教師自身もおそらく真剣な勉強をしなければ生みだせないものである。ここでは自然や社会のシミュレーションとしての教材が、従来の考え方とはまったくちがって新しい教材として生み出される必要がある。たとえばコンピュータのシミュレーターを利用してコンピュータを自ら組みたてるといような作業、こういう作業は単なる電気の学習ではなく、論理的思考でもある。あるいは歴史を自ら記述する場に生徒をおくための資料の準備。歴史は暗記するものでなく、記述するものである。そういうプロセスの研究は、一步一步積みあげて教科外の時間にも本当の生活へ生徒を導き入れる努力をなすべきである。それらの積みあげが、やがて大きな転換のエネルギーとなって結集するであろう。転換のエネルギーは教師がまず新たに行動することによって、生徒に行動する場を多少ずつでも提供することを通じて蓄積されるであろう。

(四) 質の転換から制度へ

教育のこのような質の転換への努力がもう少し積みあがって行かなければ、本質的な意味での教育の転機はこないというべきであろう。もし制度が先行するといふのなら思い切った抜本的な制度改革を断行するときのみ教育の転機が来る。たとえば高校を卒業後、いったん社会生活の現場に入り、そこからさらに上級の学校へ入学することは、それは場合によっては社会奉仕として万人に義務として課してもよい。そのためにはそれぞれの職場に実地の訓練をするプログラムを準備することが必要である。国立大学は夜間も解放して、収容力を倍増すること。その入学は無試験であつてもよいが、卒業は厳しくし

エックすること。大学の教育についてはフィールドワークを土台にして行なわれること等の処置が講ぜられる必要がある。このことは今の主題でないから今は詳しく述べない。

しかしこのような方向の施策が当然のこととして相当な理解が必要なのである。またそのような方式が実際に実効をあげるにも、その下地が必要なのである。そのような下地をつくる努力は、今ほどのようにはじめられるかといえ、教育者の一人でも多くが、質の転換への努力をするということ以外にならう。明日の教育はそういう努力がひきよせるものであつて、自然にくるのではない。